会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

医療の言葉、短歌の言葉

上川北部医師会
士別市立上士別医院
竹内（たけうち）　幹夫（みきお）

私たち医療者は、ときとして救えない命、治らない病と向き合わなければならない。医療の言葉には、真実を正確に伝えることが求められる。しかし同時に、その真実によって患者の希望まで奪ってはならない。近代臨床医学の基礎を築いたウィリアム・オスラーも、医師は真実を告げながら希望を損なわぬことが大切である、という趣旨の言葉を残している。

「私は助かりますか」と患者に問われたとき、医療者はしばしば「全力を尽くします」「今できる治療を続けましょう」と答える。それは未来を保証する言葉ではない。しかし、「あなたを見捨てない」という意思を含んでいる。

私自身も、臨床のなかで答えることのできない問いに出会い、それを短歌にしたことがある。

「来年の春まで私生きられる？」
「栄養つけようこれ食べちまおう」

医療者が直面する倫理的緊張は、真実を語る義務と、生を支える責任との間にある。この矛盾は論理だけでは解決できない。「奇跡を約束しない」「未来を保証しない」、しかし「現在を放棄しない」。そのような臨床の言葉は、むしろ祈りの言葉に近い。

折口信夫（民俗学者、歌人）の言語観には、言葉を単なる情報伝達の道具ではなく、現実に働きかける力を持つものとして捉える思想がある。

すべてを言葉にしてしまえば、かえって失われるものがある。医療者もまた、病の意味を安易に語ることはできない。ただ薬を処方し、傷に触れ、今日の食事や明日の散歩について話す。意味を説明する代わりに、今日を生きる行為を支えるのである。

CPAPの目盛り追ひぬるその瞳
夕陽見ようとギャッジを上げぬ

これは短歌の言葉とよく似ている。短歌は結論を出さず、教訓を述べず、解決策も示さない。それでも人の悲しみを受け止めることができる。それは短歌が、経験に意味を与える言葉というより「意味を決めずに経験を共有する言葉」だからではないだろうか。

臨床の言葉と短歌には三つの共通点がある。第一に未来を確定させないこと、第二に感情を直接語らず行為に預けること、第三に沈黙を残すことである。「生きる意味があります」と説く代わりに、「少し歩いてみましょう」と言う。そこにあるのは指導者ではなく伴走者の言葉である。

医療者と歌人、そしておそらく宗教者にも共通するものがある。それは「去らないこと」である。解決できなくても去らない。答えがなくても去らない。治せなくても去らない。「私はここにいます」「あなたを結果だけで扱いません」と、言葉よりも存在によって告げ続ける。

死に近き母に添寝のしんしんと
遠田のかはづ天に聞ゆる
斎藤茂吉　『赤光』

短歌は「語らずに去らない」文学である。すべてを言わない。しかし視線を外さない。その場にとどまる。自由詩ほど長くなく、俳句ほど切り詰めない三十一音は、沈黙を抱えながらなお人に寄り添える長さなのかもしれない。

そして短歌的な言葉は、患者だけでなく医療者自身をも支える。救えなかった命、答えられなかった問いを、説明や結論によって閉じるのではなく、そのまま抱えて生きてゆくために歌う。医療の言葉と短歌の言葉は、ともに人間の限界から生まれる。「語りすぎず、しかし去らない。」そこに医療と短歌の、静かな倫理がある。